さらば定めの異世界譚

トテトテフォース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さらば定めの異世界譚

【Ｎコード】
Ｎ５９２３Ｋ

【作者名】
トテトテフォース

【あらすじ】
主人公が異世界に飛ぶ
ちーと系主人公が異世界で活躍する
ただ、敵も強かったりする

望まぬ邂逅・下された命令（前書き）

文体崩れがちかもです

この物語はフィクションです
現実の個人名団体名等には一切かかわりがありませんのであしからず。

間違えて、短編小説にナットりました
睡眠時間をけづり過ぎた模様です

望まぬ邂逅・下された命令

招かれるように古い石造りの階段を上っていた

幾つ目の鳥居だろうか？後ろを振り返れば最初にくぐった鳥居は見えない

薄もやの中、足を止めることを忘れたかのように前に動き続けた

階段が消えた、単に終わっただけだが

気付くのが遅れたため、そこにあった物が消えたかのような

妙な違和感が残った

周りは未だに薄もやに包まれ、霧が体にまとわりつく肌寒い感覚があった

突然、目に光が飛び込んでくる

まぶしく、目をきつく閉じ、腕で目を庇う

目の疼痛が薄れた頃、恐る恐る腕を下に降ろし

薄目を開けて前を見る

そこには木造の、大昔に出来たようでもつい先刻出来たようでもある

不思議な神社があった

「・・・おや、お客さんのようだね？いらっしゃい。」

頭を丸め法衣を着て竹のほうきを持った神主が・・そこにはいた

太陽は俺の後ろにある

ならば、先ほどのは神主の太陽拳か・・・

この神主、もしかしたら地球人最強の男かもしれない

「・・・こんにちは」

「こんにちは」

人の良さそうな笑みを返しながら俺に答えた

「ここはどういった神社なのですか？」

先ほどから、狛犬も狐も獅子もネズミも何か守護していそうな物は

どこにもなく

奉ってそうな神も見あたらない

「そうだな・・・ちょっとあっちとあっちを

見てもらえるかい？」

「・・・おぉ」

ゆうに三十メートルはある鳥居が、そこにはあった

「なんすか・・・あれ」

「ふむ、鳥居・・だよ
この神社が祀っている神様の・・・ね？」

どんだけでかい神だよ・・・と心の中で突っ込みを入れるのを忘れずに

俺は、何の神か聞いてみることにした

「一体全体、どんな神なんですか？」

「それは、時空と空間の神だよ」

「・・・どこのポケモンですか？」

まるきり、ディアルガとパルキアとかそんな話だった

「・・・？なんの話しだい
ポケモン・・・というと、ポケットモンスターという英語の略の事かな？
だとするとアメリカの俗語で、ポケットの中のモンスターとして男のあれという意味であっているのかな？
しかし、それだと鳥居と全く関係がないよね
・・・では、なんなのかな？」

「・・・流行のゲームの名前で
その内容に、時空と空間の神が同時に集うてんがんざんとやらがあ

りまして
その話しに酷似しているな一と」

「ふむ、確かに似ているね
だけど、この二人が何故ここにいるか知っているかい？
・・・ちゃんと理由があるんだよ？」

「二人？」
神様の数え方なんて一神教が多いこの世界では
多くの矛盾があるし、大抵奉られている神は元人間なのだから
問題ないのかもしれないが・・
神主が神を二人と数えるのは意外であった

「ふふ、あぁ彼らは
僕の先祖なんだ、だから、二人なんだよ」

・・・あぁ、なるほど

「そうなんですか、では
なんでここに、神がいるか教えてもらえませんか？」

「あぁ・・・それは
昔々、違う世界から神のような力を持った
悪魔がやってきたんだ
・・・その時に、ここにいる神様達は
その神様を、あそこの・・・見えるかい？
ちょうど僕の後ろにある鏡に封じ込めたんだ
その封印が解けないように、未だにここにいる・・・らしいよ
僕は見たことが無いんだけどね？」

といって、神主さんは笑った
やはり、人の良さそうな笑顔だった

前触れはなかった、何の音沙汰もなくいきなり
時が止まり、空間が裂け、俺の目の前に二人が現れた
「え・・・？
・・・あぁ、どうも初めまして
先ほど話題に上がった、時空と空間の神様たちですか？」

「はっ、まぁそうだ」

「・・・ユーキシェ無愛想すぎるでしょう
はぁ、まったく
ごめんなさいね、この人ツンデレなのよ」

「だ、だれがツンデレだっ」

「あなたよ、ユーキシェ
・・・はぁ、このままだと話が先に進まないから
そのまま続けるわね「な、ちょっと待て俺はツンデレじゃ・・・」
続けるわね？」
「・・・はい」

かかぁ天下というやつだろう
時空か空間を操るなら天下無双かもしれないが

「何の御用でしょうか？」

「・・・そうね、言うわ、けどその前にまず
その、かしこまった口調を辞めるべきね

別に、元からならかまわないんだけど
あなたの場合は、そうじゃないんでしょう？」

「・・・別に、ペルソナの一つでしょう？
まぁ、本心を隠せないこっちの方が都合が良いのかも知れないが」

いや、なんか神社とかだと緊張して自然丁寧口調にならない？
ならない・・・そうですか

「ふん、だれが人間などという下等な種族なもの≪ぺぎゃ≫がはぁ
「本当すみません、ユーキシェったらまだ人間じゃないと言い張っ
てるんです
後で、たっぷりとしつけておきますから
・・大目に見てください」

「は・・ははっ、い、いやだなぁ
そんな、怒るわけないじゃないですか・・・は、ははっ」

頭潰したーーーっ！！！
神様だから、死んでないんだろうけど死んでないんだろうけどっ！！

「さて、じゃあ本題に入らせてもらいます
あなたにはこれから、神隠しにあってもらうことになりました」

「・・・はい？」

なぜ？Ｗｈｙ？

「先ほど、神のような力を持った悪魔の話は聞いたと思います
そいつが、今から丁度一年前

この結界から逃げました、ですから、その悪魔をあなたに倒して貰いたいのです」

「はい？・・・え～と、ちょっと待って？
相当昔に封印した悪魔が、あそこのにある鏡の封印から逃げ出した？
「はい」
それで、その悪魔を俺に倒してもらいたいと・・・つまりはそういうことか？
「はい、ちなみにその悪魔は力を溜め込むために異世界で療養中です
私たちを倒すために相当力をつけてくると思うので
後、三年ぐらいは異世界にいると思います
そこであなたは、異世界に言って力をつける前のやつを倒して貰いたいのです」

「待て待て待て待て、ちょっと待て
ちなみにって補足情報のレベルじゃあないぞっ！」

厄介な書類の禁則事項みたいな感じだ
ほら、下の小さい字

「まぁ、そうかもしれませんね
では、準備はよろしいでしょうか？」

「言い訳ねーだろっっ！！」

この状況で準備って・・・

「むぅ、何が不満なんですか？」

「何が不満て、いきなり俺が死にそうな目にあってることですが！

？」

「な。なんと
巧妙に隠したはずなのにばれている！？」

「神の力を持った悪魔と戦うと聞けば
解りたくなくても解るっての・・・」

「あれ、なるほど・・・」

「・・・帰っちゃだめですかね？」

俺は、んなヒーローには向いていない
よくて参謀だ、適材適所という言葉もある
もっと、適役を当てはめるべきだろう

「駄目です、拒否権はありません」

・・・あぁ、俺に人権はないのかと
妙なところでオカルトを実感する今日この頃

「・・・じゃ、実力行使でっ」

後ろ向きに
全力全開前進ＤＡ――≪ゴツン≫
・・・？痛い

「空間と時間が隔離された空間から
一体どこに行こうと・・・」

「おっしゃるとおりで・・」

「では、もう気は済みましたか？」

「ちょ、ちょいまって
いくつか質問したいんだけど、いいか？」

「・・えぇ、かまいませんよ」

「え～とまず、なぜ俺なんですか？」

「あぁ、それはですね
あなたが、イレギュラーを起こしたからです」

「はい？」

「えぇっと、本来
あなたはあの話を知ることも、そもそも、ここにくることさえ
ありえるはずの無い存在なんですよ」

「・・・はい？
じゃあ、そもそも、俺はここに来る予定じゃないのにきたんで
悪魔を殺すことになったとそういうこと？」

「簡単に言うとそうですね」

「・・・はぁ、ま、それは解ったけど理由がわからない
招かれざる客みたいなものか？」

「いえ、我々としては歓迎すべき客人ですよ

それで、なぜ、違う未来を選択したから異世界に送り込まれるかでしたっけ？」

「・・・まぁ」

異世界にほおりこまれることを告げられたせいか
軽くメランコリーになった

「それはですね
起きうるはずの無い行動を起こしたものは
その後の未来が、不安定になるんですそれも
予想外の度が大きければ大きいほど
なので、異世界への改変が楽に行える
だから今月、一年の中で最も霊力の集まる三の月にここにきて
しかも、我等に会うなんていうイレギュラーを起こしたので
いまや、私たちの時空に隔離しておかないと
送り込もうとしている異世界より、違う異世界に勝手に
迷い込みそうなほど、あなたの存在はふにゃふにゃです
だから、ですね。」

滅茶苦茶だ、でたらめ過ぎる
しかし、ここまで見せられていまさら否定もできない
さて・・・

「・・・解った
ただ、何の力も無く俺が行っても無意味だ
何で、非常識とあった神様が行ったらどうだろうか？」

・・・心のそこからいきたくねーなぁ～

「う～ん、ただ私たちは
この世界から離れられないので・・・
あなたもいやですよね？時間の流れがあちらこちらでおかしくなったり
空間に穴がたくさん開いたら・・・」

・・・うん、間違いなく大勢の人が死ぬな

「あぁ、それと
私たちが死んでも、代わりが見つかるまでそうなります」

「うわぁ、拒否権が無い」

「そうです、さっきも言いましたけど
拒否権は無いです・・・しかし」

「・・・しかし？」

「何の力も無く送り込んでも意味が無いですよね・・・
解りました、向こうの世界の神と交渉してみます」

「え？・・・あなたは、無理なんですか？」

「えーと、この能力すごく燃費が悪くて・・・」

「はい」

「大体、一個唱えるのに
平均人一生分のエネルギーが・・・」

「・・そりゃ無理ですね」

「ですよね」

・・・このままいても、どうせ飛ばされるか
なら、さっさと行こう
後、二年の間に悪魔を倒すのか・・・
できるのかな？まぁ、いいか
やるだけしかやれんからやるだけやろう

「ふぅ～・・・じゃあ
飛ばしてもらえますか？」

「解りました、では」

言葉に表せないような、音、のようなものを聞いた気がする

望まぬ邂逅・下された命令（後書き）

読んでいただいてありがとうございます
当方、未熟者にて
感想とか書いてもらえるといろいろありがたかったりします

旅の計画思わぬトラブル

一体ここは何だろうか？
空間と呼ぶことすらおこがましいような異空間で
一次元とも二次元とも三次元とも四次元とも解らないような所で
俺は、何かに包まれて
方向というのがあるのかも解らないが
どこかに向かっているようだった

世界が変わる、先ほどまでいた空間が終わり
白に包まれた部屋に出た
そして、神なのだろうか？よく解らないローブのような物を
着ると言うより纏った
神らしき人物がそこにいた
こちらを確認すると、その人物は両手を挙げて、ふざけている風もなく
「よーほー、こにゃにゃちは」

とのたまった、明らかに頭が別ベクトルに向かっている
しかも、真面目な顔でやるのだ・・通常なら腹を抱えて大爆笑をしていただろう
だが、呆気にとられていたせいか何のリアクションも出来なかった
ここからなにかこの人の人となりを少しでも理解することが出来るならば
少なくとも、まともでは無いと言うことだけだろう
「・・・あれ、教わった挨拶と違ったのか？
こ、こほん
私は、多世界神サラドレル・ルパー
状況は聞いている、君の強化を手短に済ませ
早々に異世界に飛ばすとしよう」
なにか、気まずい雰囲気という物がそこにはあった
「・・・その挨拶を教えた人とは
早急に縁を切った方が良いと思いますとだけ
言わせてもらいます」
これをネタにいじるつもりなどはない・・・
一応神だし
「そ、そうだよな・・・

神の神であるあの人と、縁を切れる気は・・・しないけど」
神様も神様で大変みたいだ・・・
「さて、それはもう良いとして
君に付加する能力だが・・・何が良い？」
選べるのか・・・なんて便利な
「では、俺がこれから行く世界の中で最も強いエネルギーを教えて下さい」
その世界にいる悪魔を倒せばいいのだ
つまり、その世界最強になればいい
「あ～、亜力だね」
「亜力・・・？」
意外だった、俺はてっきり魔力とかが出てくると思っていたからだ
「うん、亜力
まぁ、君の所で言う魔力と同じ物だと思ってくれればいいよ
正確には違うんだが・・・まぁ、一般的に区別できないしなぁ～」
・・・凄く興味がある、何だろう魔力と同じだがよりエネルギー量がある
亜力？なんだそれは？

「・・・つまり、ファンタジー世界の魔力が亜力という別称に変わったと言うことですか？」

「・・・う～ん、いや
その世界にも魔力は存在する、それよりも高度なエネルギー体
精霊の力？とか、そんな感じの物だよ？
エネルギーが高すぎるせいか、勝手に意志を持つこともあるみたいだから
精霊の力と、呼ばれているみたい」

「そ、そうなんですか
じゃあ、その亜力を人の扱える限界値まで引き上げられますか？」

幾つか理由がある、個人的に
人の扱える力の限界値を超えてエネルギーを引き出すと
人をやめるか何かしらのフィードバックを受けることになる
だからこそ、扱える限界値までしか、俺は力を扱うつもりはない
なに？何でお前がそんなことを知っているかって？
そりゃ、過ぎたるは及ばざるが如しって事を
前の世界で、嫌って程くそじじぃに教わったので・・・
詳しい諸事情は省く、想像してくれ・・・

「ん、簡単なことだよ、随分謙虚だね

でも、そうか・・・あの、悪魔を殺すんだったね
それじゃ足りない、全然足りないよ
まぁ、今から行く世界については殆ど知らないんだろうから
無理からぬ事かも、知れないけどさ
じゃあ、僕が勝手に能力値あげるけど
それで良いかい？」

「・・全然かまいません、むしろ有り難いです」

いや、上のと併せて前の神からして

そんな能力値あげられなさそうだなとか、そんなこと考えてましたけど

この神様大丈夫っぽいね！？不幸属性があるが

「そうか・・・じゃあ
えーと、黒目黒髪だから・・・ぶつぶつ
亜力値的に・・・ぶつぶつ
ついでに魔力値も・・・ぶつぶつ
体力系統も・・・ぶつぶつ
・・・・・・・・はい、終わったよ
成長率も最大にしといたから
ま、頑張ってくれ。。君の双肩に君の世界の命運がかかっている」

「ははっ・・・なるようになりますよ・・・・」

最後にプレッシャーかけられるとは・・・

「ほんじゃ、草原にでも転送をしとくんで頑張って

それと、悪魔の居場所は解らないから自分で探して

さて、流転する世界の定めよ

今この時我にひれ伏し

この者を幽玄なる草の大地に君臨させよ」

うわぁー、なんか魔方陣ぽいのとか現れましたよ？

そして、頭の方から徐々に転送されていく

しかし、異変が起きた

「な、なんだ！？どうしたんだ！？」

そう、魔方陣が一部書き換えられていたのだ

俺は、先ほどまで見えていた草原からどこか豪華な建物へと

移動するのを感じていた

「くそ、・・召還魔法か・・・・・・・・・・・・・・・・・」

と、消えていく体でそんなことを聞いた

妙な召還・明日はどっちだ（前書き）

俺には文章力が無いことを再確認しました・・・
それでも良いという心が大海原のように
広い方だけ、先へお進み下さい・・・

妙な召還・明日はどっちだ

俺は召還された、豪華な建物の中へと
その場所は暗闇にもかかわらず物がくっきりと写るという
奇妙な場所だった
そんな場所だからだろうか
周囲にたたずむ沢山の人は俺を見て息をのんでいるようであり
その顔には、恐怖と畏怖と戦慄を顔中くまなく浮かべていた
ちなみに服は、恐らくこの世界の物と思われる
魔道師のローブらしき物を着ていた

「こんにちは勇者様
ここはアイルデントヘル・ブラット・ルエ・キュエルツ王国です
勇者様には魔王をたおしてもらいたくここまで来てもらいました」
棒読みで声は震えており、用意されていた台詞をそのまま言いました感が満載だった
現に今も、この巫女っぽい子は足を軽く振るわせ
目線を右上に向けながら、必死に次に言おうとしている言葉を思い出しているようだった

「・・・あのぅ、なぜそこまで怖がっていられるので？」

俺はそこまで怖い顔だという自覚はないのだが・・・

もしかしたら、とても怖い顔なのかも知れない

・・・いや、それはないか

なんたって、中学校入学式時点で昼飯がないのにも関わらず

焼きそばパン買ってこいとか言われたしな・・・

もちろん　のしたが、んで、理由を聞いてみたところ

一番弱そうだったからっつってたしな、まぁ、言った後に

もう一度のしたが

「ひ・・・い、いえ

怖がってなどおりませんわ、ただ・・・あなたは、どちらの地域に

お住まいで？」

？魔王を倒すために、国の中で魔力値の高い者を

召還したということだろうか

しかし、そんなことを聞かれてもな・・・

俺にはこっちの世界に家なんて無いから

ホームレスという選択指以外無いぞ

さて・・・どうする

「・・・私の住んでいた場所は訳あってもう無いのです」

と言って俺は、物憂げな表情をする

正直なところ、言い訳を考えるのも面倒なんだ

「そ、そうだったんですか・・・それは失礼なことを聞きました
申し訳ありません」

「いえ・・・・」

まぁ、ごまかす必要も特にないのだが

詳しく聞かれて俺が異世界人だとバレルより

この世界の住人で、一般常識が欠けていると思われた方が良いだろう

ちなみに、恐らくこの人達の中の俺のイメージは

自分たちの種族が住む場所を追われ、各地を転々とする移民的な者
だと思われる

「ふぅ・・・では、定例通り
降魔の儀式をして頂きたいんですが、準備はよろしいでしょうか？」

予断無き状況（前書き）

遅れ取ります
日本語が総崩れで、後に残ったのは単語の羅列でした
それでも良いという
心が仙人のような方はどうぞお進み下さい

予断無き状況

・・・降魔の儀式、なんじゃそりゃ？

俺は、全く持ってそれが何のことか解らなかったが

とりあえず、ピンチと言うことが周囲の一変変わった（早く早く）

という、期待のまなざしから感じ取られた

個人的には、あのルパーさんがアフターサービスをしてくれると助かるのだが

しかし、他人の力を当てにするとろくな事には成らないのも事実

ここは、自分の力だけで何とか解決すべきだが・・・

さて、どうする？

「申し訳ない、自分がこの国に来たのはつい最近のことですし

降魔の儀式というのを知らないのですが？」

おそらく、魔法を使う数値が高い者＝魔法をそれだけうまく使える者

という認識なのだろう、だが、残念なことに

私は、魔法なんぞ一個も使えんのだ

「そ、そうなんですか・・・

あ、あのぅえーと、呪文は簡単で

来たれ、我に従いし魔よ

その種族をここに表し、力でもって輝け

分析魔法、キュエル

という、呪文です・・・ど、どうぞ」

そういって、彼女の前に白色をした人の頭ほどの直径の球体が現れた

その球体は光り輝き、俺が召還された台らしき一段高い場所を端（十五メートルくらい）まで照らしていた

・・・なるほど、これだけ簡単だと、出来ないものは余りいないのかも知れない

まぁ、いいか

「ふぅ（息を整え俺は集中する）

（今後有利な状況に持って行くために、ここは失敗できない

要は、呪文を唱えればいいのだ多分それで魔法が発動する・・・はず！！）」

と息巻き、呪文を唱え始めた

「来たれ、我に従いし魔よ

その種族をここに表し、その力でもって輝け

分析魔法、キュエル」

全ては一瞬の出来事だった

と、俺が言うのと同時に周りの顔の色が変わり

目の前の、召還師らしき人の髪が揺れ

自分も出場所の解らぬ風を全身に浴びながら

目の前の場所を見ていた

そして、白と黒を混ぜた、灰色の薄暗い光が室内を駆け回り

全ての色を支配するように、全ての魔法を支配するように、全ての者を支配するように

部屋中を蹂躙した

いつの間にか、目の前にあった白い玉は消失していた

そして、そこには恐怖に凍り付いた召還師の顔があった

変態とピンチ

辺りが静まりかえった

・・・・・・・・・・・・長すぎる沈黙

だが、声を上げるわけにも行かずただただ黙る俺

・・・・・・・ざわ・・・・ざわざわ・・・ざわざわざわ

ざわざわざわざわざわざわざわざわざわざわざわざわざわっ

うわっ、うるさっ・・・

この中の人たちの、困惑の度合いを俺に知らせた・・・・

・・・チート使用ってのは解ってたけど

何この反応・・？もう、めっちゃ怖がられてるんですけどっ、おれっ

凄い壁が出来た感じだ・・・「あ、あのぅ・・・」

「は、はひぃぃっ！！」

「・・・どうしましたかね？」

「ひぃえ、あの・・・えっと・・・・・すいませんでしたっ！！

お願いします・・・殺さないで・・・・・」

本格的に何した俺っ！！

・・・まぁ、確実にチート性能のせいだろうけどさっ

そこまで怖がらなくても・・・

互いが互いに何が出来るでもなく、気まずい沈黙が流れる中

その珍客は現れた

ばーーん、勢いよく扉が開き

そのものはこう、怒鳴り込んできた

「私の召還の最中に邪魔が入り、失敗してしまったっ

至急やり直しを進言するっ」

といって、パンツを頭にかぶりピッチピチのTシャツを着て

下半身が丸見えの男はそう言った

嫌な沈黙・・・それを破ったのは巫女さんだった

「「きゃぁぁぁっぁぁぁぁっぁ」」

響き渡る大絶叫それもまた当然でもあると言えることだった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5923k/

さらば定めの異世界譚

2010年10月10日22時28分発行